

グローバル化が進んでいる現代、在留外国人は増加の傾向にある。それは決して大都市に限ったことではなく、地方でも増加している。そのためさまざまな場面で文化の違いを意識することになる。「郷に入っては郷に従え」ということわざがあるように、自分が異国の地にいるのであればその地の文化に従うのが基本と考える人も多い。しかしそれは、一歩まちがえば自己の文化が正しいという価値観の押しつけになってしまう。しかも自文化の正当性や優位性のみを強調し、在留外国人を差別したり排除したりしようとする意見や行動へとつながりかねない。

異質なものを理解し、また異質なものに理解してもらおうとすることは、たしかに面倒くさい。しかし、それでは両者の溝は埋まらない。在留外国人と日本人の住民とのより深いコミュニケーションを進めていかなければならない。教える側・教えられる側といった関係ではなく、「顔の見える隣人」として対個人で交流を深め、お互いが理解し、お互いを認め合うような関係を築くべきであると考ええる。

実はこの問題は外国人に限らないともいえる。性的マイノリティの人たちや障害のある人たちもこの延長にあるのではないか。政治家による差別発言、ネットにおける匿名の中傷はいっそうになくならない。声高に訴えることによってむしろ分断をあいり、異分子を排除した集団を生み出そうとしているように思われる。性的マイノリティの人たちや障害のある人たちが受け入れることができきないのに、在留外国人をなんの差別もなく受け入れることができるのだろうか。私は疑問である。在留外国人も、性的マイノリティの人も、障害のある人も「普通」として受け入れ、誰に対しても同様に接しなければならないはずだ。深いコミュニケーションを通してお互いが理解をしていく。それが共生の第一歩であると考ええる。それができて初めて多文化共生社会となっていくのではないだろうか。

コンビニの店員に外国人を多く見かける。これまで中国や韓国の人が多かった気がするが、それ以外の国の人も増えている。工事現場、建築現場などでもさまざまな国の人が働いているのがあたりまえになった。しかし、外国人が働いているレジと日本人が働いているレジの両方があいているとき、私たちはどちらを選ぶだろうか。あるいは道を尋ねようとしてたまたま歩いていた外国人と日本人がいたとき、どちらに尋ねるだろうか。日本人を無意識に、あるいは意識的に選んでいるのではないだろうか。

同調圧力という言葉をよく耳にする。皆が同じことをすることを暗に求めるといふものだ。これは異分子を排除することにつながっている。このルーツを考えると、皆一緒に同じことをやってきたという小学校からの教育にあるのではないかと思う。これからはみんな違って当然という考え方が重要ではないだろうか。この実践が大変難しいのは想像がつくが、その考え方に立った学校教育が大切だと思う。

さまざまな国の人々が働く日本社会は、ますます多文化化が進み、異文化の人々と共に生きていく時代になったといえる。外国の人たちは日本の空気が読めない。一方で日本人はよそから来る人たちの空気が読めない。互いに不安と違和感が募るばかりである。そして互いに不信感を抱き、やがて排他的な感情をむき出しにする人々が生まれるようになる。これは日本だけでなく、諸外国でも見られる現象である。「国家」の枠組みを越え、「国際社会」の枠組みまで拡大して、グローバル時代の人間の資質を育むことが重要である。外国籍の人々が住む地域は全国各地に及んでいくと思われる。だからこそ、まず学校教育が重要である。一方的に日本の空気を教えたり、日本社会への適応を説教したりするのではない。共に学ぶ教育を準備しなければならないだろう。「多文化共生社会」の構築のために、小学校から多文化教育を進めていくべきである。